

イタリア語教育の拡充とイタリアの大学との学術交流協定に向けた研究報告

著者名(日)	土肥 秀行
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	13
ページ	109-113
発行年	2013-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000647/

イタリア語教育の拡充とイタリアの大学との学術交流協定に向けた研究報告

Proposals for improving the teaching of Italian and plans for an academic exchange agreement with the University of Bologna

土肥 秀行

文化政策学部国際文化学科

Hideyuki DOI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では2011年度より実施されている表題研究の報告がなされる。その研究が目指すところは、静岡文化芸術大学内でのイタリア語教育の充実化と、ボローニャ大学との学術交流協定の締結である。

In this article I discuss the research done in the year 2011/2012 for the improvement of the teaching of Italian at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC) and plans to begin an academic exchange agreement between the SUAC and the University of Bologna.

はじめに 研究の目的

表題研究は、平成23年度学長特別研究として実施され、年度があらたまってもなお関連する試みが継続的に行われている現在進行形の課題である。高田和文教授が研究顧問、深田てるみ准教授が現地調査担当（2011年11月にミラノ工科大など）を担った。研究代表として全体の統括を行った土肥から当報告は行われる。

研究目的は2つある。

第一に、静岡文化芸術大学における「イタリア語教育の拡充」が挙げられる。本学では「イタリア語I,II,III,IV」においてイタリア語教育が行われているが、現行の内容は、国際文化学科の専門科目「地域言語」のひとつ¹として、2年生以降、週2コマ、1年間に限り、初級のみ、というものである。報告者が担当することになった2009年度以降の2年間で大幅な履修生の増加がみられた。初年度（2009年）が年間を通して15名であったところ、次の2010年度は34名、2011年度は32名となった。2012年度は26名と「安定期」に入っている。制限のある条件下であっても、履修者が従来の2倍となる状況に対し、イタリア語教育を広めつつ（履修生の数だけでなく、学内と県内でのイタリア語教育の認知度の向上も意図する）、充実させることが必須である。学内（学生・教職員）における高い関心と、学生の学習意欲をかきたててそれに応える語学教育環境を整えるのが当研究の目的である。

第二の目的として、イタリアの大学との学術交流協定の締結が挙げられる。未だ本学は欧州大陸のいかなる大学とも協定をもたず、国際文化学科を擁する大学としては未整備の状態にある。ボローニャ大学総合芸術学科（通称ダムスDAMS）、フィレンツェ大学外国語学科、ミラノ工科大学に関して現地調査を行った結果、まずは実現可能性が高く意義深いボローニャ大学との提携に目標を絞る方針をとった。本論においてもボローニャ大学についての記述を中心とする。目指すは、学生・教職員にとって双方向的、包括的な協定である。一般に、海外の大学との協定のメリットとして、教員にとっては短期またはサバティカルによる長期の滞在、さらには国際シンポジウムの共催などの研究活動、職員にとっては短期もしくは長期の研修活動、学生

にとっては一年未満の留学、各大学の外国人センターでの短期語学研修、ワークショップ参加などが挙げられる。そもそも海外の大学との協定締結は、大学にとって、以前から寄せられている「海外の提携大学が少ない」との声の払拭につながる。また本学の位置する浜松の街が、イタリアとの関係から益することは少なくない（「おわりに」で触れる）。研究開始から2～3年度内、つまり2014年度までのボローニャ大学との協定締結を念頭に研究を行っていく。

1. イタリア語教育に関する研究実施内容

現状では、イタリア語の初級の授業が週2コマ、1年間続くだけであるが、限られた場であるからこそ、難関多き初級であるにせよ、脱落させない、挫折させない努力が担当講師には求められる。講義に変化をもたせ、常に魅力的であるようにする、そのための2つの方策を次に挙げる。

まずはネイティブ講師の招聘である。本学でイタリア語を担当するのは土肥のみであることから、その講義はどうしても「話す・聞く」の要素に欠けてしまう。そこで外部からネイティブのゲスト講師を招く。半期につき最低でも2回あるとよい。2011年度は、アンドレア・フィオレッティ氏（東京外国語大学博士課程、2011/5/19と6/22）、ディエゴ・マルティナー氏（東京大学留学生、2011/12/1）、エドアルド・ジェルリーニ氏（東京大学特別研究員、2012/1/25）らを特別講師として招いた。一年を通じて4回、おおよそ2ヶ月に一度の割合である。受講生にとってイタリア語に慣れる恰好の機会となっている。イタリア語の場合、浜松近郊にネイティブは少なく、どうしても東京圏から招聘することになる。その経費を個人研究費で賄うには限界があり、大学の予算内に教育補助費のような枠が設定されることが求められる²。

第二に、オリジナル参考書の作成である。毎回の講義のはじめに、出欠を兼ねて、予め暗記してきてもらったイタリア語会話のスキット3、4つをミニテストで確認をするようにしている。その暗記のためのフレーズ集を2011年度来まとめている。最終的には『イタリア語会話表現集』

として都内の出版社から発表される予定である。「イタリア語」の講義では文法の学習がメインであるが、「実用性」のあるフレーズをそのまま覚えるという作業によって変化をつけている。

以上が講義のなかでできる「工夫」であるが、これまで繰り返し述べてきたようにそもそもカリキュラムによる制約があり、イタリア語学習の場はカリキュラム外にも求められうる。外国語学習には目標策定が肝要であるといわれるが（目標があれば挫折しない）、具体的にはイタリア語検定と全日本学生イタリア語弁論大会へのチャレンジが挙げられる。

イタリア語検定については、5級さらには4級の取得が、到達可能と目される。毎年10月と3月に実施されており、浜松近辺の試験会場は、東京、横浜、名古屋である。検定料の上に遠征費がかかることから、チャレンジ奨励のためにも、少なくとも検定料（5級4000円、4級5000円）に関しては補助がなされるよう大学と交渉したが、このような名目で学生個人にお金を支給するのは無理との回答しか得られなかった。英語については、TOEICを本学で受験する場合、受験料が50パーセント割引されるのに対して、不平等であろう。イタリア語に限らず、外国語検定を受ける場合の大学による費用補助の仕組み作りの努力は続けられるべきである³。実績として、2011年度はイタリア語検定5級取得者が3名いる。

もうひとつのチャレンジの場は、全国学生イタリア語弁論大会である。これは毎年12月に京都外国語大学の主催により同大学で実施されている（後援にはイタリア大使館、在大阪イタリア総領事館、在日スイス大使館、NHK出版、毎日新聞ほかが並ぶ）。ちなみにイタリア語のスピーチコンテストは、2011年に第5回をむかえた同大会と、東京で行われ2011年で21回目を数える「イタリア語スピーチコンテスト」（主催は公益財団法人日伊協会とイタリア文化会館、後援にイタリア大使館、朝日新聞社、NHK）、以上の2つが存在する。後者には学生に限らず一般の参加もあり、またスピーチだけでなくネイティブとの質疑応答も審査のポイントに含まれるため、「ハードル」が高めである。報告者が薦める全国学生イタリア語弁論大会は、1位から3位までにイタリア往復航空券が支給されるという、より魅力的な設定ゆえに挑み甲斐がある⁴。2010年度には本学から3人が出場したが（全19人中）、2011年度は本学からのチャレンジを2人に絞ることにした⁵。その選定については、「イタリア語」受講者のうち、希望者は800字以内のスピーチ要旨（日本語）を提出し、教員が審査するという形式をとる。2011年度は2人が希望し、審査の結果、両者共に弁論大会に申し込むことになった（本戦出場が決まる際にも、主催者側による書類と原稿審査を経ている）。チャレンジ奨励のために、浜松＝京都の交通費を大学は負担している⁶。2011年12月10日に京都外国語大学で開催された大会に出場したのは次に挙げる国際文化学科3年の2名である。仁科十志子「新撰組—最後の忠士たち Shinsengumi: gli ultimi samurai fedeli」、藤井優里香「動物と共に生きる Vivere con gli animali」がそれぞれの題目であるが、前者は全15人中5位で在日スイス大使館賞を受賞した（画像1）。外国語を専門とするわけではない本学の学生が2

年続けて入賞することに、本学の外国語教育のポテンシャルをみてもよいだろう。こうした結果が、同年代や、続く「イタリア語」受講生の励みとインセンティブになっている。



画像1 イタリア語でスピーチする仁科十志子さん
(2011/12/10、京都外国語大学 941 教室)

本章の最後に、広い意味での「教育」、大学全体（加えて一般市民）にむけた、イタリア語・文化への誘いとなるイベントへの取り組みについて触れたい。言語とは常になにかに至るための道具であり、文化を理解するには必須であろう。そこでイタリア語学習者と一般にイタリア文化への興味を喚起するために、声楽のコンサートを催した。主催者であるわれわれは「イタリア語教育の拡充研究プロジェクト」と名乗り、すでに数々の演奏会を催した実績のある「静岡文化芸術大学の室内楽演奏会」との共催で、東日本大震災被災者応援のための会とした。2011年12月22日、本学講堂において、《ナターレ 2011 声楽の夕べ Natale 2011 - una serata lirica》（「ナターレ」とはイタリア語でクリスマスのこと）と銘打ったコンサートが開かれた。出演は藤井泰子（ソプラノ）、セルジョ・ペトルツェッラ（テノール）、マッシモ・スカピン（ピアノ）の3氏であり、イタリアの芸術普及、被災者支援との趣旨に賛同し、無報酬で出演している。いずれもイタリアでは中堅の実力派アーティストである。一般市民も含め入場無料に設定し、会場での募金は「SUAC for Japan」浜松から大船渡へ「音楽活動支援」に充てられた。150余名の来場者からの募金は9万円弱にのびた。曲目は名作オペラからのアリア、そして有名な歌曲が中心であった。オペラ『蝶々夫人』より「ある晴れた日に」、『トスカ』より「星は光りぬ」、『ノルマ』より「清らかな女神よ」、『トゥーランドット』より「誰も寝てはならぬ」、歌曲は「カタリー（つれない心）」、「オー・ソレ・ミオ」、「帰れソレントへ」、「フニクリ・フニクラ」などである。当日の土肥の解説でも触れたが、アリアは優れた詩（つまり文学）としても鑑賞可能である。旋律だけでなく、イタリア語自体の響きも聴衆は感じ取り、一層イタリア語に対して興味をもったはずである（画像2）。



画像2 コンサート《ナターレ 2011 声楽の夕べ》
(2011/12/22、静岡文化芸術大学講堂)

カリキュラムの限界ばかり嘆いていてもはじまらない。制度についての再考は機をみてなされていくべきである。2015年度のカリキュラム改変にむけて、外国語に関する議論は、英語と中国語の重点化の方向で進められている。複数外国語の重要性をうったえる立場からみて残念な状況であり、ありうべき「イタリア語上級」新規設置の可能性はゼロである⁷。代わりに制度を変える必要のない、自己完結型のカリキュラム改変ならばできる。具体的には、2012年度に入ってから「イタリア語」について、「週2回で単年学習」という現在の運用方法を、「週1回で二ヶ年学習」に変更するよう学内調整してきた。そこで2013年度からは、「イタリア語I」（前期）と「イタリア語II」（後期）を初級レベルとし、「イタリア語III」（前期）と「イタリア語IV」（後期）を中級レベルとするよう決定した。1年目に週1回、初級を学んでから、2年目に週1回、中級を学ぶ。こうして、学生から寄せられる「初級から中級へと段階的に学びたい」という少なからぬ要望に応え、学習意欲をかき立てていく。

以上述べてきたイタリア語教育の拡充の先には、当然、学生・教職員のためのイタリアの大学での研修の道も用意されなければならない。次章でその取組について述べる。

2. イタリアの大学との学術交流協定に向けた研究実施内容

学生、教員、職員のそれぞれに対して研修の場を可能とするような協定作りの可能性を、ポローニャ、フィレンツェ、ミラノの大学で模索するため2011年11月に現地調査を行った。土肥は11/6～12の期間にポローニャとフィレンツェに赴いた。

フィレンツェ大学では、組織として独立性の高い外国人センターが、本学学生の短期&長期の語学文化研修先として適当であるが、そのセンターと協定を結ぶところまで至らなくともよいと判断した。その理由は3つあり、毎年コンスタントに留学生が渡るわけではないだろうし、当方は大学であるのに対し先方は大学付属センターとアンバランスであり、なによりイタリアから日本に来る留学生の望めない双方向性に欠けた関係となるためだ⁸。フィレン

ツェ大学においては外国語学科との協定が考えられる。実際、2012年秋から国際文化学科3年生1名が、通年で同学科に留学している。

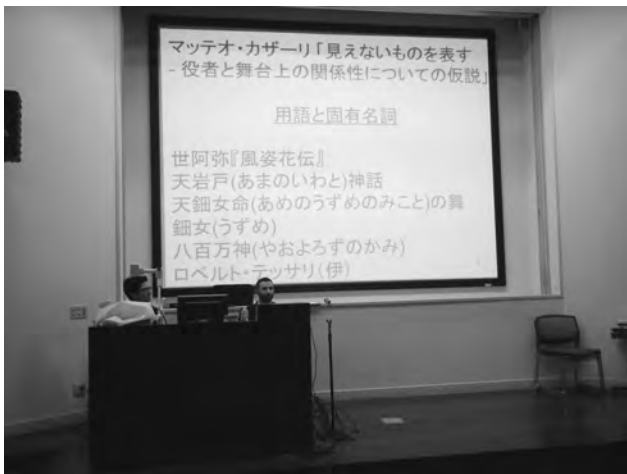
協定の可能性が感じられるのが、ポローニャ大学との場合である。すでに同大学とは協働体制の構築がはじまっている。2011年度学長特別研究「身体芸術論研究I」の枠内で、本学の梅若猶彦教授が、ポローニャ大学で能楽・現代劇ワークショップ（2011/11/4-10、於・大学ラボラトリー）を開き（画像3）、また国際シンポジウム「新たな能—非連続の連続」（2011/11/10、於・総合芸術学科）では議論をリードした（画像4）。同時期に出張した土肥は、これらのイベントをフォローしつつ、ポローニャ大学教員と共に協定の可能性について話し合った。開催されたワークショップやシンポジウムが共同研究の実績となる以上、2大学のコラボレーションはすでにはじまっており、その延長線上に協定締結がありうるとの共通認識にいたっている。シンポジウムに続いて、2012年3月には報告集が、ポローニャ大学出版局からポローニャ大学と本学の共同出版で発刊された（伊語）⁹。シンポジウムと報告集を通じて、ポローニャ大学のジェラルド・グッチーニ教授は東西の中世劇にみられる儀式性、マッテオ・カザーリ講師は東洋の伝統演劇における秘伝、ジョヴァンニ・アッザローニ名誉教授は歌舞伎と能の様式性、日本文学の翻訳家のリディア・オリリア氏は三島由紀夫の『近代能楽集』、土肥は逆説的な能の身体性、梅若教授は虚構としての身体性について論じた。国際シンポジウム第2弾として2012年10月19日には本学で「見えるものと見えないもの—能をめぐる」が開催された（画像5）。初回のシンポジウムにも参加した梅若教授は不可視を可視化するパラドクスについて論じ、同じくカザーリ講師は『風姿花伝』を例に「見えないもの」を扱う演者の役割について検討した。今回から新しく参加した本学の高田和文教授は能が東西の前衛劇に与えた影響についてスポットをあて、フィリピン大学ディリマン校国際センター准教授で本学の客員研究員でもあるアンパロ・アデリナ・ウマリ氏はフィリピンでの能の実践について報告した。また、シンポジウムにあわせて来日したマッテオ・カザーリ講師と今後の協定交渉は進められることとなっている。



画像3 ワークショップ最終日、梅若猶彦作『イタリアン・レストラン』公演（2011/11/10、ポローニャ大学ラボラトリー）



画像4 シンポジウム「新たな能—非連続の連続」
(2011/11/10、ボローニャ大学マレスコッティの間)



画像5 シンポジウム「見えるものと見えないもの—能をめぐって」
(2012/10/19、静岡文化芸術大学 278 大教室)

それではここでボローニャ大学と結ばれる協定のアウトラインを描いてみたい。あくまで大学本体同士が結ぶものである。これまでも土肥はボローニャ大学の国際交流担当の副学長ならびに国際交流事務局とコンタクトを保ってきた。実際の交流は、窓口となる学科と教員を通じて行われる。本件においては総合芸術学科のカザーリ講師と本学国際文化学科の土肥である。学生、教職員が研修を行う際には、費用は基本的に元の所属大学が負う。ただし学生の一年未満の留学の場合には、先方からの留学生に対し、授業料の免除、必要最低限の保険料負担を保証し、住居の確保

や費用補助については努力目標として対応する。基本的に、留学生を受け入れるか、受け入れないかはその時々状況に応じて双方の合意のもと判断する¹⁰。イメージとしては、本学にすでにある協定のうち、韓国ホソ大学校とのものを緩くしたかたちに近い。

おわりに 協定のメリット

当研究のアウトリーチ活動として、本学公開講座の範疇で、2012年5月26日に「イタリアの大学と都市—最古の大学を擁するボローニャの例から」と題するレクチャーを行った¹¹。そこで強調したのは、いま浜松の町がボローニャに寄せる関心である。浜松市は、市長が中心となって「音楽のまち」をさらにPRするために、ユネスコ創造都市ネットワーク（音楽部門）に加盟申請している。そのネットワークのメンバーのひとつがボローニャ市であり、先例に学ぶために、たとえばマウロ・フェリコーリ氏（ボローニャ市経済・振興局長、ボローニャ大学特別教授）が、招待者として「創造都市フォーラム2011」（浜松アクト、2011/11/19）において講演を行った。この運動には本学の教員がブレインとしてこれまで関わってきた。地方自治体同士の結びつきには、パラレルにおかれるボローニャ大学と静岡文化芸術大学の大学間交流から益することもあるだろう。よって町と大学が一体となってボローニャとの関係醸成にむかうよう提案し当報告を終えることとする。

基本データ

ボローニャ Bologna

- ・エミリア・ロマーニャ州の州都、人口38万人、イタリア第7の都市。
- ・第一次産業、第二次産業（中小企業）ともに盛ん。オートバイメーカーのドゥカーティとマラゲーティ、殺虫剤メーカーのVAPE（ヴァーベ）、ファッションブランドのフルガが本社をおく。見本市地区は建築家・丹下健三の手による。

ボローニャ大学 Alma Mater Studiorum - Università di Bologna

- ・1088年創立、「世界最古の大学」ともいわれる。
- ・ペトラルカ、エラスムス、コペルニクスなどが学ぶ。
- ・建築学部以外はすべての専門を擁する国立の総合大学（イタリアの大学はほとんど国立で、その数は61であり、その他20ほどの大学がある）。
- ・在籍学生数8万人超
- ・主な日本の提携校に創価大学、早稲田大学、東京大学、慶應大学。数年前までレオナルド・ダ・ヴィンチ・プログラム（学生の派遣プログラム）の派遣先に指定されていたのは早稲田と東大。
- ・日本に留学するのは外国語学科、歴史学科、翻訳・通訳コースの学生。
- ・本学にとって本質的なテーマであるアートマネジメント研究の分野においては、ボローニャ大学総合芸術学科（通称ダムス DAMS、1970年創立）は先進的研究拠点である。

注

- 1 学科専門科目であるため他の6言語のように全学レベルでの履修が想定されておらず、基本的に他学科・他学部にはひらかれていない。本学で学べる8外国語のうち、イタリア語と同じ扱いなのはインドネシア語のみ。
- 2 費用を個人研究費から捻出する2012年度前期は、ゲスト講師招聘は1度に留まった（エドアルド・ジェルリーニ、2012/5/10）。後期も同様であろう。
- 3 加えて2015年度にはじまる新カリキュラムにおいて、外国語検定の結果に応じて単位が付与されるようにするアイデアもある。
- 4 2010年12月に出場した芸術文化学科4年生は3位となりイタリア往復航空券を得た。また2012年の第6回大会では国際文化

- 学科 2 年生が準優勝し、航空券とペルーシア外国人大学短期語学コース奨学金を得ている。
- 5 エントリーは大学推薦に依るという規定はないが、実質、所属大学教員のサポートが必要なため。
 - 6 2012 年度からは、「学生の諸活動に対する支援経費」として大学より、交通費から自己負担分 5000 円を引いた額が 2 人分支給されることになったが、これは教員が毎年申請していかなければならない。
 - 7 来るカリキュラム改変においては、国際文化学科専門科目ではなく全学共通科目とし、加えて 2 年次からではなく 1 年次から履修可とすることで、「イタリア語」をよりひらかれたものとすべきだろう。
 - 8 フィレンツェ大学外国人センターの事務局ジョヴァンナ・ヴィテッコ氏の話によれば、カナダの 3 大学と協定が結ばれている。現在、本学においてはフランスのディジョンにあるブルゴーニュ大学国際フランス語研修センター CIEF との協定を検討中である。毎年数名の研修希望学生が出る見通しのなか、協定を結ぶ意義はあろう。
 - 9 同時期にカザーリ講師とアッザロー二名名誉教授が監修した、演劇専門雑誌《Hystrio》の日本演劇特集号（2012 年 1 月）に、本学の高田和文教授と土肥が寄稿している
 - 10 開学から十余年、いまだ本学はヨーロッパからの留学生をむかえたことがない。出身国にこだわるわけではないが、イタリアからの留学生をまずは一人実現したい。
 - 11 2012 年 5,6 月の公開講座「イタリアの創造力」で、土肥の回に続いたのは、谷川憲司教授「イタリアのデザイン—魅了する造形美、もの作りの心を探る」、高田和文教授「現代都市ローマー—永遠の都—のさらなる変貌」、エドアルド・ジェルリーニ氏（東京大学外国人特別研究員）「日伊の恋愛詩—愛を叫ぶイタリア人、恋を思う日本人」、根本敏行教授「イタリアの産業と都市—北イタリアの工場都市と第三のイタリア・ポローニャ vs 浜松」である。全 5 回の聴講者はのべ 492 名にのぼり、前年度「フランス編」に続くシリーズとして、大きな反響を得た。谷川、根本両氏の回については、講師自身がまとめた要旨が『文化と芸術』（本学文化・芸術センター発行、第 16 号、2012 年 9 月）に掲載されている。

